

わが青春のウィンブルドン

—グラッド・ストーン通り110番地—

ウィンブルドンはロンドンの中心街から汽車で20分ほどの近郊にある。わたしたちの家は、ウィンブルドン駅から歩いて10分ほどのグラッド・ストーン通り110番地にあった。

ここは大通りの騒音からは全く遮断された静かな住宅街であった。宣伝カーが騒音をまき散らすこともなく、広告も皆無で、落ち着いたたたずまいの街である。冷涼な気候のせいか、木々の緑が日本に比べて格段に濃い。

ロンドンの法律事務所で研修するため、1978年8月、わたしと妻は渡英しウィンブルドンに住んだ。煉瓦作りの借家は、80年前に建てられた骨董並の古さである。

玄関を入ると、細長い玄関ホールがある。1階には応接間と居間それに内庭を囲むかたちで細長い台所と食堂がある。応接間には油絵、年代もののソファの3点セット、コーヒーテーブル、ステレオ、飾り棚、テレビが備わり、ワイングラス、銀の食器セット一式も備え付けである。およそいたれりつくせりで、身一つで入居しても生活に困らない。

2階には寝室が2つ、小部屋1つで、わたしたち夫婦には広すぎるくらい。20坪くらいの、内庭には、リンゴ、バラ、紫陽花が咲き乱れていた。

家具や什器備品は全てが恐ろしく古い。洗濯機は18年前のもので、入居早々故障してしまった。修理屋に来てもらうと、「10年前にもこの洗濯機を修理したことがある」という。この洗濯機も今迄何代の人が使ったのだろうか。18年前の洗濯機でもちゃんと補修部品があるというのだから恐れ入る。節約が徹底しているというより、変化を恐れているのではないかと思つたくらいイギリスは全てに伝統的な社会であった。

近所の住民は中高年の年輩者が多く、街はひっそりとしていた。70代、80代の老夫婦がゆっくりと散歩していたり、振り椅子に座り日がな通りをぼんやり見ている老人の姿も多い。人々は伏し目がちに歩き、ヒソヒソと語り合う。時は緩やかに流れていた。

—Madam, you can't force the fire.—

家の近くには大英帝国の名残か数軒のインド料理店があった。わたしたちはウィンブルドン・コモン（人手ができるだけ加えない自然のままの公園）近くの小さな料理店をひいきにしていた。

初めてこの料理店に行ったとき、わたしたちはタンドーリ（チキンにカレー粉と香辛料のパプリカをまぶしたもの）を注文した。だが、30分たっても40分たっても料理がこない。わずか3組の客しかいないのに、時間がかかりすぎる。妻はだんだんイライラしてきた。

わたしたちのことを忘れたんじやないかしら？

まさかそんなことはないだろう。こんなに空いているんだから……。

さらに 10 分待っても料理がこない。東京だったらこんなに待たせられることはまずない。
いくら料理がうまくともこんなに待たせられては興ざめである。
さすがに妻もじれてボーイを呼んで催促をした。
もう 50 分も待ってるんですけど料理はまだなんですか？

すると、端正なマスクをした 20 代半ばのインド系とみえるボーイは、まるで妻を諭すような調子で静かにいう。

Madam, you can't force the fire.

(マダム、料理の火を急き立てることはできませんよ)

なるほど！わたしたちは今までのイライラも忘れ、ボーイの答にいたく感心した。

「すみません。もう少しでできます」というのが普通だろう。悪びれずに平然と You can't force the fire. というのはやはりイギリス流だ、とわたしたちは納得した。「料理が遅い」といって騒いだのが恥ずかしい。

ディナーは会話を楽しみながら 40～50 分待つのは普通なのかも知れない。この緩やかに時が流れる国では、焦りは禁物である。ここではそういうことになっている……。

——ストライキ：ゆりかごから墓場まで——

ウィンブルドンに居を構えてまもなくイギリス全土でストライキが頻発した。ロンドン、ウェールズ、ヨークシャー、リバプールと賃上げを巡って指名ストや山猫ストが続発した。病院、鉄道、水道、新聞、B B C、ごみ収集、墓掘り人夫、火葬場と、「ゆりかごから墓場まで」ストライキに見舞われた。

イギリスを代表するタイムス紙も印刷工組合が中心となってストライキに入り、B B C もストライキでテレビ画面には「ストライキにより放映中止」ができる始末。英国鉄道は 1 週間に 2 回ストライキをするし、果てはパン屋までがストライキに参加する。

ゴミ収集人夫のストライキは特に激しかった。ストライキのためゴミの回収が遅れ、路上にゴミ袋が溢れたのを見かね、ある人がゴミ袋を片づけた。これを知ったゴミ収集人夫の組合は、片づけたゴミ袋を元通り路上に戻すよう要求した。ゴミを片づけた行為は彼らの職域を冒すものだという。こんなバカらしい話と思える話がひとしきりジャーナリズムを賑わす。

ストライキは人々の生活の全般に渡って深刻な影響を与えた。一時は非常事態宣言も検討されたぐらいである。

だが、これほど深刻なのに人々の反応はわたしたちとはひと味違う。トラックのストライキで塩、野菜、肉などの食料品が不足して手に入らない場合でも、人々は決して過剰反応はない。感受性が鈍いというのではないが、どこか日本人とは違い落ちついている。ストライキが解決する様子も見えないのに、イギリス人は腰を落ちつけてどっしりと構えている。お隣の老夫人も、「まったく今度のストライキはバカげているわ」と非難はするが、喋り方は普通の調子である。イギリス人はとにかく最後のギリギリになるまで騒がないことになっている。感受性の層が幾重にも重なっているらしい。

イギリス人に比べると日本人は感覚が脳中枢に直結しているから、過剰反応し、すぐ慌てふためく。またアメリカ人だったら、声高にストライキを批判し、裁判所に差し止め命令を求めるだろう。

「ゆりかごから墓場まで」のこのストライキほど、彼我の差について考えさせられたことはなかった。

——ウィンブルドンの鐘の音——

1日の仕事が終わって6時に帰宅すると、夕食後わたしたちは近くのチャーチ・レーンをよく散歩した。

チャーチ・レーンは豊かな緑に囲まれた閑静な住宅街である。イギリスでは街路樹を剪定する習慣がないから、見上げるばかりのプラタナスの大木が幾重にも枝を広げアーチになって道路にかぶさり、かっこうのシェードをつくる。夏の夕暮れに緑のトンネルを散歩すると、どこからか夕闇を突き裂いてバラの強い香りがする。路上にはホースチエスナツの赤い花が絨毯を敷き詰めたように散り落ちている。

夜8時を過ぎたというのに、夕日はまだ沈みきらない。夏の雲が茜色や赤紫に染まって幼いころへのノスタルジアを誘う。

緑のトンネルを歩んでいくと風見鶏のある古い教会に至る。アーチ型の煉瓦の正門を入り、木戸の横門をくぐると墓地である。白い十字の墓標には、バラやカーネーションが供えられ、まわりには赤い百合の花が咲き乱れる。

周囲は何一つ音もしない静寂に包まれる。マロニエの白い花が夕闇にほのかに浮かび、その密やかな香りが辺りに漂う。ここには現代人が忘れてしまった全き静謐と慰安がある。

わたしたちが夏の夕暮れの風情に身を委ねていると突然、教会のアンジェラスが「カンカン カカカン カカカカカカ」と夕闇をつらぬいて鳴り響いた。その鐘の音はいつまでも鳴り続け、やがて闇の中に消えていった……。

昨年の夏、わたしたちは15年ぶりにウィンブルドンを訪れた。わずかの間に全ては移り変

わってしまった。妻と毎日食料品を買いに行ったウールワースは火事で焼け、ジェリード・イール（蒸した鰻のゼリー合え）やつぶ貝を売っていたあの屋台も今はない。友人のポール夫婦も引っ越してしまい、駅前の広場も様変わりしてしまった。

緩やかに見えた時の流れも一時として絶えることはなく、その積み重ねはやがて大きな変化をもたらす。

あの古き良きワインブルドン・ライフはもう二度と還ることはない。わたしたちは青春の思い出、青春の息吹を求めてワインブルドンを再訪したが、そこで見たのは見知らぬ街であった。風に乗ってあの教会のアンジェラスの音を聞いたと思ったのはわたしの幻聴だったろうか。